



メール マガジン版 音楽の世界

創刊号 日本音楽舞踊会議 (CMDJ) 2002年12月31日(火) 発行

The COMMITTEE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0074 新宿区北新宿 2-25-8 FAX 03-3369-7496

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

メールマガジンの発行にあたって 事務局長：中島洋一

この度、メール・マガジン版『音楽の世界』を発行することとなりました。

こメール・マガジン発行の目的は、日本音楽舞踊会議とい団体およびその活動内容を紹介すること、そして機関誌『音楽の世界(活字版)』の内容を紹介することが、主な目的ですが、それだけではなく、読者に自由に投稿してもらい、それを分け隔てなく読んでいただく雑誌として発展させていきたいと考えています。

もちろん、この雑誌は申し込めば、どなたでも自由に購読出来ますし、購読の打ち切りも自由です。

発行回数など今後のことはまだ未定ですが、活字版『音楽の世界』の月刊に対して、このメルマガ版『音楽の世界』の発行は不定期とし、大体年に5～6回程度の発行をめざしたいと思います。文書の形式については画像などを簡単に取り込める長所があるHTML形式も検討しましたが、文書サイズ、汎用性の両面を考え、テキスト形式でスタートすることにしました。

また、このメルマガは日本音楽舞踊会議関係者だけではなく、読者のみなさんと一緒に発展させて行く雑誌にして行きたいと考えておりますので、みなさま方のご協力をよろしく、お願い致します。

このメルマガに記事を掲載したい人、また購読を進めたい人がおりましたら、事務局長にメールをお送り下さい。

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

投稿原稿

賛助会員：浅岡弘和氏より

メールマガジン版『音楽の世界』創刊おめでとうございます。

私は最近、炎のマエストロ小林研一郎の取材が多いのですが、先日はマエストロが日フィルを振った「復活」ライヴのライナーノートを書きました。

次のマーラー交響曲第三番のライナーも書きましたが、プロジェクトU? 目下私は宇宿允人を第二のフジ子にしようがんばっています。

10日の産経の「話の肖像画」『魂の音を求めて』

16日のNHK、ETV2002「孤高の指揮者宇宿允人～運命の3日間」

そして20日発売の音楽現代新年号の宇宿特集では我が国きっての論客、西部邁、富岡幸一郎両氏が異種格闘技戦？初めて音楽評論界に乱入してきます。

プロジェクトUどうなりますか？後は26、27の「第九」本番と新しいCDが出ます。

浅岡弘和氏（巨匠亭さんのホームページ URL）

<http://www.music.ne.jp/~classix/The%20classix>

ローデン・千恵さん（会員：ピアニスト；在米）より
年の瀬も間近くみなさまお忙しくお過ごしのことと存じます。下記ウェブ・サイトは、アメリカ現代音楽のオーガニゼーションで一番大きい American Music Center のウェブサイトで、なかなかおもしろい記事が載っています。月に一度ぐらい更新されます。よろしかったらお読みください。センターはもともとコーブランドなどにより設立されました。

<http://www.NewMusicBox.org>

日本も例年より寒いと聞いております。どうぞお体大切に、良いお年をお迎えください。

会員の畑山千恵子さん（研究）より

今年は、私の方でさまざまな事情があって、コンサートをすることができませんでした。来年こそは、早い時期を見て、コンサートをしようと考えております。詳しくは、決まりましたらお知らせいたします。

今年行ったコンサートで印象に残ったものは、ライブツィッヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、井上直幸さん、伊藤恵さん、迫昭嘉さん、ジャン・マルク・ルイサダのピアノリサイタル、ポリーニ・プロジェクト、北とぴあ国際音楽祭記念事業「モーツアルティッシモ」、東京の夏音楽祭、パシフィック・ミュージックフェスティバル、二期会「ニュルンベルクのマイスタージンガー」でした。来年のオペラでは、ロシアのキーロフ・オペラがプロコフィエフのオペラ「戦争と平和」の日本初演があるため、見ておこうと決めています。その他、いろいろなコンサートがありますが、どれに行こうかと考えております。

その一方、自分のコンサートもきちんとやらないと大変です。

畑山千恵子

CHIEKOHATAYAMA@aol.com

舞踊と電子音楽のホームページの URL が以下のように変更になりました。

中島洋一

http://www007.upp.so-net.ne.jp/yoichi_n/

日本音楽舞踊会議の小史

日本音楽舞踊会議の歴史を役員名簿、機関誌関連の重要事項だけを取り出してまとめてみました。政治活動、社会活動、音楽活動は多岐に渡りますが、残存する資料も十分ではなく、誤解を招く恐

れもあるので、今回は割愛しました。

しかし 1982 年の総会を境にして、その前後では会の性格はかなり変わって来ていることがこの小史からでも僅かですが窺えます。

1982 年以前は政治活動にかなりのウエイトをおいていたのに対し、1982 年以降は音楽活動の方にウエイトが移って来ています。ちなみに私が入会したのは 1987 年で、1982 年以前の日本音楽舞踊会議の活動については先輩諸氏に伺ったり、『音楽の世界』の記事より窺い知ることが出来るだけで詳しい事はわかりません。

しかし、[言論活動等を通して社会に対して積極的に関わり、社会的視野を持ちながら音楽文化活動を展開して行く] という会の基本的姿勢は、創立以来 40 年を迎えた現在においてもずっと引き継がれています。

なお、事務局長。代表委員の顔ぶれの中には、故清瀬保二氏（作曲）、故佐藤敏直氏（作曲：元日本現代音楽協会委員長）などの方々も名を連ねている筈ですが正確な資料が手許に無かったので割愛しました。

（事務局長：中島洋一）

- 1962/06/27 日本音楽舞踊文化会議・創立総会（於・市ヶ谷ユースホテル）
事務所を東京労音内におく。
- 1962/07 事務局長 宗像和、事務局員：小宮多美江
- 1962/09 『音楽の世界』創刊（音楽の世界社：発行人：小宮多美江）
- 1962/10 機関誌『音楽舞踊文化』創刊。
- 1963/01 運営を企画、組織、財政、機関誌の 4 部に分担
事務局長：岩船雅一
- 1963/01 第 3 回総会にて『音楽の世界』準機関誌をとすることを承認。
- 1965/01 第 4 回総会：会の名称を日本音楽舞踊会議とする。
- 1965/04 会報：『音楽舞踊』No.1 発行。
- 1968/10 関西音楽舞踊会議創立。
- 1969/01 東海音楽舞踊会議創立。
- 1970/10 臨時総会、規約改正など（委員長制を代表委員制に、他）
- 1971/08 『音楽の世界』100 号発行
- 1972/03 第 11 回総会：『音楽の世界』を機関誌とする。
- 1972/09 『音楽の世界』臨時増刊 [この一冊でわかる日フィル問題] 発行
- 1973/01 創立十周年記念パーティー
- 1975/07/23 ~ 25 第一回全国音楽舞踊会議交流会
- 1975/09 “バルトークと日本の音楽界”
~ 没後 30 年『音楽の世界』9 月特別号
- 1975/11 日本音楽舞踊会議編 [近代日本音楽] あゆみ出版より刊行
（1967 に行った“近代日本音楽ゼミナール”の記録集
- 1975/12 日本の作曲ゼミナール第 1 期始まる。
（伊福部昭、松村禎三、平尾貴四男）
- 1976/01 日本の作曲ゼミナール第 2 期。
（高田三郎、清水脩、安部幸明。清瀬保二、以後 78 年 7 月まで 20 回）
- 1976/02/11 第 15 回総会：特別会員制度を決定：
清瀬、岩船、土田、関の 4 氏を推薦。
- 1980/02/11 第 19 回総会：（渋谷勤労福祉会館）
事務局長；関谷邦夫、機関誌局長：助川敏弥
『音楽の世界』編集長：植田トシ子
- 1981/02/11 第 20 回総会：（渋谷勤労福祉会館）
事務局長：矢沢 保、機関誌局長 & 編集長：留任
- 1982/01 セミナー [現代音楽への道] 開講：講師・助川敏弥）
- 1982/02/11 第 21 回総会：（渋谷勤労福祉会館）

事務局長：助川敏弥、機関誌局長：河本喜介、編集長：川口思郎
事務局、編集部新体制に、常勤職員制を廃止
会員自主管理制とする。

- 1982/06 賛助会員制度発足
- 1983/09 『音楽の世界』に会員名簿を掲載（年1回固定化）
- 1984/02/11 第23回総会：（新宿文化センター）
事務局長：小平時之助、機関誌局長：助川敏弥、
編集長：長野俊樹
- 1985/02/11 第24回総会：（新宿文化センター）
事務局長&機関誌局長：留任、編集長：原田稔
- 1986/02/11 第25回総会：（新宿文化センター）
事務局長：寺原伸夫、機関誌局長：助川敏弥、編集長：原田稔
- 1988/02/11 第27回総会：（新宿文化センター）
事務局長：寺原伸夫、機関誌局長：助川敏弥、編集長：矢沢寛
- 1991/02/11 第30回総会：代表委員：中田一次、深沢亮子
事務局長：中島洋一、機関誌局長：矢沢寛、編集長：助川敏弥
（尚、中島洋一は渡米中のため、帰国後の4月より正式に就任）
- 1993/02/11 第32回総会：代表委員：中田一次、深沢亮子
事務局長：中島洋一、機関誌局長：空席、編集長：助川敏弥
- 1993/10/20 日本音楽舞踊会議創立30周年記念音楽会：東京文化会館：大ホール
- 1994/02/11 第33回総会：代表委員：留任、事務局長：留任、
機関誌営業部長：高島和義、編集長：助川敏弥
- 1996/02/11 第35回総会：代表委員：留任、事務局長：中島克磨、
編集長：助川敏弥
- 1998/02/11 第37回総会：役員は留任；英二三枝子、矢沢寛の両氏が特別会員に
- 2000/02/11 第39回総会：代表委員：留任、事務局長&編集長：助川敏弥
財政部長：高島和義、研究公演部長：北條直彦
（この年以降機関誌部長は編集長が兼任するようになる）
- 2001/01/04 『音楽の世界』のサイズがB5版からA6版に変更される。
- 2002/02/11 第39回総会（東医健保会館）
代表委員：助川敏弥（新任）、深沢亮子留任、
事務局長：中島洋一、編集長：野口剛夫、
公演企画部長；北條直彦、財政部長；高島和義
- 2002/09/01 臨時総会（としま産業会館）にて、青年会員制度新設が承認される。

日本音楽舞踊会議と部会について

日本音楽舞踊会議には、作曲部会、ピアノ部会、声楽部会、弦部会、研究部会の5つの部会があります。コンサートや研究会にはそれぞれの部会が主催するものと、公演企画部で企画し会全体で行うコンサート、研究セミナーとがあります。

部会紹介

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kaiin/bukai.htm>

投稿文

私と電子音楽の関わりについて 中島洋一（事務局長）

実は以前、『音楽の世界』などに私が電子音楽の創作研究を始めるまでの経緯を書いたような気がするが、その草稿が見つからないので、改めて書き下ろすこととする。

『音楽の世界』96年12月号の[ポートレート]で書いたように、私が傾倒した音楽はロマン派の音楽であり、芸術とは[存在するが目に見えないもの]つまり人間の魂の奥深くに漂うものを表現するのでなければならない、という拘りをずっと抱き続けた私が、まさか電子音楽の創作研究を始めようとは、20才頃の私には予想も出来ない事であった。

私の恩師、高田三郎氏と一緒に飲んだとき彼は私によくアドバイスしてくれたこものである。[君はある面では非常に不器用な人間だ。こういう風には書けば時流に受け入れられるということが判っていて、またそう言う風には書けば書ける腕を持っているのにそれが出来ない]、つまり自分の叙情性、感傷性から抜け出せず、それで今日風（私のごく若い頃は音列主義的作法が我が国の作曲界に蔓延していた）のスタイルで書くことを拒否してしまっている、といった意味である。[今は君はそれで損をしているが、やがてそれが君の取り柄になるんだぞ]と。そのような期待を抱かせた私が、電子音楽の研究を始めたことは先生にとっては予想外で、頑固な保守主義者を自称する高田三郎氏は、さぞやがっかりしたことであろう。

私は、黎明期の電子音楽作品にはほとんど興味を持てなかった。諸井誠、黛敏郎の共作[7のバリエーション]、シュトックハウゼンの[習作2]などはちょっと面白いと思えなかったし、無機的で非人間的に思えた。わずかに湯浅譲二氏の[アイコン]などに、いくらか共感できただけだった。いつ頃か定かではないが、多分1962年の頃であったと思う。NHKの現代音楽特別番組（この頃は現在に比べると現代音楽も比較的多く放送で取り上げられた）で、黛敏郎氏が[僕は電子音楽は嫌になった。無機的で芸術的可能性があるとは思えない。もう電子音楽の創作からは撤退する]というような発言をするのを聞いて、我が意を得たりという気持ちにさせられた。その時、確か電子音楽の経験をオーケストラや室内楽にフィードバックさせ、クラスター手法や様々な特殊奏法を取り入れて今までにない響きを創出した、ペンデレッキヤルトスワフスキーの作品がはじめて紹介されたが、黛氏が[僕には、電子音楽よりこっちの方が面白いや]などと言っていたことを、今でも覚えている。

私が最初に興味を持った電子楽器は、オンド・マルトノという楽器である。

確か1962年メキシカンが来日した際、トゥランガリラ交響曲がN響で演奏された。私は学生の身分で金が無かったので、生では聴けなかったが、大学の図書館から借りてきた総譜を見ながら、オープンテープに録音したものを聴いた。特に、交響曲の中で独奏楽器として使われているオンド・マルトノの音色には非常に魅力的に感じていた。

ところが幸いにも、1967年に私が母校の国立音楽大学へ勤務してから間もなく、大学は文部省の助成金でオンドマルトノを購入したのである。ところが、作曲系の教員は誰もその楽器に興味を示さず、大学院の一室に陳列されたままになっていた。そこで私は大学の許可を得て、オンド・マルトノの演奏研究をはじめた。この楽器はアコースティック楽器の要素を含んだ電子楽器であり、3つのスピーカーのうち、メイン・スピーカーは電子発信音を増幅するだけだが、パーム・スピーカーとメタリック・スピーカーはそれぞれ、弦、シンバルを共鳴させるようになっている。そして演奏には鍵盤とリボンの両方を使う。今の電子楽器に比べれば原始的で機能は限定されているものの、アコースティック楽器の繊細さと、電子楽器の音色多様性を兼ね備えた楽器であった。

それからしばらく後の1974年7月11日に、大学の作曲仲間と今は無き新宿のモーツァルトサロンで新作発表のための小さなコンサートを開くことになり、私は[オンドマルトノとピアノのためのセンチメンタル・コントラスト]と、[オンドマルトノのためのインプロビゼーション]の2曲を、オンドマルトノのパートを自作自演して発表する事になり、練習を重ねた。ところが、このフランス製の華奢な楽器は日本の高温多湿の気候に耐えきれず、会場に運んだ後、リハーサルの段階で煙を噴いて故障してしまったのだ。一応なんとか音は出るものの増幅系がイカれてしまい、小さな音しか出ないのである。非常にクヤシイ思いをしたが大きなピアノの音と対抗しなければなら

い[オンドマルトノとピアノのためのセンチメンタル・コントラスト]の演奏は到底不可能なので、[オンドマルトノのためのインプロビゼーション](これは殆ど即興演奏である)を説明を交えながら演奏することでお茶を濁した。

私は 1975 年～ 76 年にメルヘン・オペラ『蝶の塔』を書き上げたが、増田宏三氏や学生達の協力を得て、1977 年 5 月 14 日立川市民会館で公演することになった。そして、そのオーケストラの 1 パートとして、あのクヤシイ思いをしたオンドマルトノのパートを書いたのである。それで大学当局にオンドマルトノの借用申請をしたが、非常に貴重な楽器なので先生(つまり私)が演奏するならよいが、学生が演奏するのでは貸し出せないと言われた。しょうがないから、私がオケビットに入って演奏しようかとも思ったが、演出を担当した伊勢谷氏が、[作曲者がオケビットに入ってしまったら、自分が作曲したオペラの舞台をみる事が出来ない。それでは可哀想だ]とってくれた。途方にくれていると、当時私が担当していた基礎理論(ソルフェージュ、鍵盤和声など)のクラスの作曲科の学生の中に天野正道君という学生がおり、彼はまだ 10 代だったその頃から、様々な電子楽器をいじった経験があり、楽器会社の人などとも人脈もあった。それで、当時まだ珍しかったシンセサイザーで代用してみたらどうか、と進言してくれ、自らローランド社と掛け合い、無料で楽器を借りてきてくれた。

オペラ『蝶の塔』の公演は成功で、関根礼子氏の批評も好意的だった。また、代用したシンセサイザーの効果音も、効果的であった。

それがキッカケで私はシンセサイザーに興味を持ち始め、大学院に置かれていたローランド社のシステム 100 を研究した。また、当時ローランド社の取締役をしていた、則安 治男氏の配慮で、システム 700、MC-8 をいじらせてもらい、自ら新発売のシステム 100M やマルチデッキなどを買って込み自宅で研究を始めた。

そこで、電子機器の多様な可能性に気がついた私は、他の作曲系教員有志と連名で、当時学長だった、海老沢敏氏に、大学でもっと本格的な電子機器を購入してくれるようにと申請書を書いた。それから、しばらくして海老沢敏氏から電話で呼ばれ、楽長室に赴くと、実は、私は今度新設するホール(講堂)に、電子スタジオを設置したいと考えているが、当事者(作曲系教員)からの要請がないので困っていた。今度、あなた方の要請があったので、これを機会に電子スタジオ設置の計画を具体化しようと思う。あなたが中心になって動いてくれないか、という話になった。ただ、電子スタジオ設置を正当化するには、文部省の助成金で機材を買うなど既成事実の積み重ねが必要だが、そういうことは吉田君(現在の国立音楽大学理事長)が詳しいので、彼と相談して欲しい、ということだった。予想していなかったような大きな話になって来たので戸惑いもあったが、大学の将来を見据えれば必要な研究ではあるし、電子スタジオ設置の必要性も頷けると考え、学内に『電子スタジオ設置推進委員会』という組織をつくり活動を始めた。1980 年のことである。82 年には文部省の助成金申請が通り、それと大学で自主購入した機材を加え、かなりの機材が揃った。また、ホールの建設に際して、私もホールの音響機器の選択や、電子スタジオの音響設計について意見を言う立場になったので、音響設計者と渡り合うため、独学でホール音響などの研究もした。83 年にホールが完成し、4 月にその建物内に築かれた電子スタジオに機材を移し、その年の 4 月に私の手で作られた国立音楽大学第一号の電子音楽作品がホールで流された。

その後 1985 年には、『電子スタジオ設置推進委員会』を発展解消し『電子音楽研究室』を立ち上げた。そして、それがきっかけになり私は 89～91 年の渡欧・渡米したわけだが、その間、学内で予想外の事態が勃発していた。それから 10 年余り、見かけ上、私は学内における電子音楽部門の中心的な研究者という立場から退くことになるが、それには安易に文書化すると誤解を招きかねない複雑な事情があるので、それが書けるような時期が到来した時、改めて筆をとることにしたいと思う。

しかし、帰国後、大学における電子音楽部門の中心的研究者の立場からは退いたものの、日本音楽舞踊会議の活動において、多くの舞踊関係の方々と知り合い、一緒に活動出来たことは幸運だった。大学改革が進行する中、単に電子音楽の専門家という狭い役割ではなく、電子音楽、舞台芸術などを総合する創造研究の中心メンバーとして、再び私は再び咲くことになる。

若い頃に嫌っていた電子音楽の研究に中年になって私が手を染めたのは、電子音楽は具体音から楽器の音にいたるまで、あらゆる音を取り込める多様性があるということ。それは創造者の創意が明確でない場合には、とりとめのない作品を作ってしまう危険性も孕むが、しっかりした創意を持

ち、素材の可能性を十分見据え、それを音楽的に消化出来る音楽性を備えていれば、多様で説得力のある作品を生み出すことも不可能ではない。さらに舞台芸術、映像などと結びつきことによって、相乗効果が生まれ、より今日的で表現性の強い作品を生みだし得るのではないかと、考えたからである。

つまり無機的な電子音楽ではなくて、その反対に、それを取り組むことで、よりドラマチックで人間的な作品を生み出し得るのではないか、という思いがあったからである。

わたしの理念を実現するためには、すでに物理的年齢においては老境に入った私だが、自からをムチ打ち、自らの可能性を絞り出すしかなかるう。

ところで、差し障りのない範囲で、天野正道君達とのその後について少し触れようと思う。前述のオペラ『蝶の塔』が上演された 77 年時は、彼らは作曲科の 2 年生であり、そのオペラ公演に際してクラス全員で、全面的に協力してくれた。ところが 73 ~ 74 年は、私の精神がどん底状態に落ち込んでいた時でもあり、天野君達のクラスは、私の長い教員生活のうちでも、大失敗した 3 つのクラスの 1 つともいえるほど、教育者としては至らない結果を招いてしまった。

その後、天野君とは第二回、第三回『舞踊と電子音楽の夕べ』で、一緒に活動したが、その後、彼はまだ一応、音舞会の会員として留まっているものの、消息さえ定かではない。機会があったら、また一緒に活動したいものだと思っている。

『音楽の世界』 1 月号の内容紹介

論壇：	日本語と私（別宮貞雄）
海外レポート	韓国から吹くエレクトーンの新しい風（阿方 俊） ロシアでピアノコンチェルト（戸引小夜子）
研究レポート	黛敏郎の音楽と生涯（西 耕一）
特別読物	サンライズ・サンセット（助川敏弥）
好評連載	C D マニアのひとりごと（小山田豊） ベートーヴェン第九交響曲の分析 （ハインリッヒ・シェンカー 訳：野口剛夫）
[新コーナー]	音楽のあるレストラン（カサ・デ・リぶ）

研究レポート 黛敏郎の音楽と生涯（西 耕一）

西耕一さんの研究レポートは過去二回、日本音楽舞踊会議研究部会例会で発表されたもので、その第 3 回目は 3 月 15 日（日）午後 3 時より金原宅で行われます。

どなたでも参加は自由ですので、どうぞお出かけ下さい。

参加希望者には、地図をお送りしますので、事務局長宛にメールを下さい。

なお、過去二回の発表の様子は日本音楽舞踊会議 HP に掲載される筈ですが WEB 担当者（事務局長）の多忙、その他の理由で、まだ掲載されておられません。

失礼しました。

なお、西耕一（序破急さんのホームページ URL を紹介します）

<http://www003.upp.so-net.ne.jp/johakyu/>

【新コーナー】音楽のあるレストラン

(1) カサ・デ・リぶ（スペイン料理）

音楽家には食通の人が多くいるという。筆者も食通かどうかはわからぬが、とにかく食べること、食べるものには尋常ならざる興味がある。興味という表現ではまだ足りないかもしれない。食べることは生きることの基本であり、まさに生きる喜びである、とも感じている。音創りを通じて自分も人も喜ばず音楽家の営みと、食事は根本的に通じるものがあるのではないか。

食の名店を紹介するコーナー、グルメコーナーは巷の雑誌には溢れている。本誌がこれらと同じようなことをしても意味がない。そこで、音楽の専門誌としての観点、つまりその店にどんな音楽があるか、ということを加味したコーナーとしてみたい。その店にどんなBGMが流れているか、というような単純な話ではなく、その店のシェフがどんな音楽観（料理観）を持っているか、ということを探るのである。もちろん、肝心の料理がおいしいのでなければ意味がないのであるが、本コーナーに登場するお店は、まずはおいしい料理に感銘を受け取材を決意させた店ばかりにするつもりである。読者の皆さんで興味を持たれた方には、コンサートの前後やパーティーなどで大いに利用していただきたい。また、他にもこのコーナーの主旨に合う店があると思われた際には編集部まで是非知らせていただきたいのである。

今回ご紹介する「カサ・デ・リぶ」は新宿西口でもう 32 年も続くスペイン料理店である。シェフの冨永安徳さん（写真）は大学の理工学部を出られ、フランス料理店の勤務を経て、24 歳でスペイン料理の店を始めるといふ異色の経歴の持ち主だ。「私は理工学部出身で、料理の修業もきちんとしたわけではありません。」と言うシェフであるが、既成の権威に囚われず、自分の感覚を信じて事業を成功させてきた手腕は並みのものではない。筆者が高島財政部長と共にこの店を取材に訪れた時、店はこの日に限り早めに店じまいしていた。実際に食事しながら取材したかったのだが、ビールだけを出していただき、シェフと 3 人で 1 時間余りも話に花が咲いた。話を伺うにはこの方が結果的に良かったと思う。調理法からオーディオ、落語、音楽と話題は尽きない。 - - - - （以下省略）

～ 全文を読みたい人は、『音楽の世界』を購読してください。～

新しい読者をご紹介下さい

いつも本誌のご購読をありがとうございます。音楽家と愛好家のために、手作りで雑誌作りに励んでおります。今本誌は 1 人でも多くの読者を求めています。

1. 読者をご紹介下さい。
年間定期購読の読者をお 1 人ご紹介の方には、定期購読の号を、3 号まで契約を延長してお送りいたします。
2. 本誌の取扱店 = 本屋さんをご紹介下さい。
細かい取引の打合せは当方でいたします。この場合も、前項と同じお礼をいたします。

月刊「音楽の世界」経営部

新年会のお知らせ

大勢の皆様のご参加をお待ち申し上げます。
日本音楽舞踊会議の会員、賛助会員の方々はもちろん、外部の方々でも事前に予約があれば参加できます。音楽家の方々と交流したい人は、事務局宛に Eメールを下さい。

日 時：2003 年 1 月 7 日（火）午後 6 時より新宿ワンサカンサ
会場住所：東京都新宿区新宿 3-4-8 新宿三和ビルセゾンプラザ 5F（TEL.03-5379-5580）
会 費：5000 円

ワンサカンサのホームページ（MAP をクリックすると地図が見られます。

<http://www.wansa-kansa.tokyo.walkerplus.com/>

昨年度の新年会の記録（当日の様子を見る事が出来ます。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kaiin/sinnen2002.htm>

『若い人達のための』コンサート開催のお知らせとコンサート参加への呼びかけ

日本音楽舞踊会議では本年度臨時総会における青年会員制度発足を受けて、2003年3月19日に新宿角筈区民会館ホールにおいて、若い人達のためのコンサートを開催する事に決定いたしました。

会としての狙いは、年々状況が厳しくなっているクラシック音楽界において才能、可能性を秘めながらも、音大などを卒業した後、経済的な理由などで、ステージから遠ざかり、才能を開花させることなく終わってしまう音楽家の卵が増えているように思われますが、そのような状況のもとで、少しでも若い人達が無理なくステージに立てるような場を提供し、若い才能を発掘、育成することも、長く続いたきた音楽文化団体である本会が果たすべき社会的、文化的使命の一つと考え、それを実行しようとするところにあります。

以下にその概要をお知らせいたしますので、優秀なお弟子をお持ちの方、優秀な若い音楽家をご存じの方がございましたら、ご紹介下さるようお願い申し上げます。

コンサートの概要

期 日：2003年3月19日午後6時半より

会 場：新宿角筈区民会館ホール

タイトル：『明日を担う音楽家達のコンサート（仮称）』

参加資格：原則として30才未満、会員の方々のご紹介があれば特に資格は問いませんが、簡略なもので結構ですから、出身校、専門、師事された先生など記した音楽学習歴をご提出いただきたいと思います。

部 門：声楽、ピアノ、（弦管楽器の演奏家の参加も可能です。）

演奏時間：声楽：8～10分程度、ピアノ：15分前後

参加費用：声楽：3万円程度、ピアノ：4万円程度。ただし、チケットを30枚程度お渡ししますので、参加費用分のチケットを売りさばいた場合は、実質的に参加費は無料ということになりますし、参加費分以上のチケットを売った場合には、参加者本人の収入となります。

演奏曲目：原則として自由

伴奏者：伴奏者は本人が手配できる場合はそのようにしてもらいますが、手配できない場合は会でお世話します。

特 典：コンサートについては、日本音楽舞踊会議の機関誌『音楽の世界』および、同ホームページに掲載するなど、会として積極的に宣伝活動をいたします。また、出演者のみなさまを集めて座談会を開催し、『音楽の世界』に掲載をいたします。（座談会の出欠は参加者本人の自由意志に委ねます。）演奏はすべて録音され、CDとして適正価格で発売されます。

募集者数：10人程度集まったら、募集を締め切らせていただきます。

青年会員：30才未満の方々には、本人の遺志により、一般会員の半額の年会費1万1千円で、青年会員として、会活動を継続できますが、今回のコンサートについては、非会員も対等に参加できます。

出演候補者の紹介、コンサート参加の申し込み先は以下の通りです。

電話の場合 : 公演企画部長 ; 北條直彦 Tel&FAX 03-3417-1947
メールの場合 : 事務局長 : 中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp
会事務所 onbukai@mua.biglobe.ne.jp

コンサート概要他会からのお知らせのページ

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/ecoh-hp.htm>

編集後記

まだまだ読者数も少なく、内容的にももの足りないものがありますが
今後、工夫して内容を充実させてゆくつもりです。
そのためには読者の方々の参加が不可欠です。
どうぞ、お気軽に投稿してください。

(中島洋一)
